

[研究報告]

夏目漱石の英国留学における負の要素 —「下宿」「過去の匂い」と「霧」「昔」を通して—

高 継 芬

【要 旨】

夏目漱石（以下漱石）は数多くの名作を生み出し、近代作家として頂点を極めた明治の文豪である。英国には約2年間留学したが、英国になじめなかったことで、その留学体験は苦渋に満ちたものであった。しかし彼はイギリスの留学から帰国後、『文学論』という大作を書き上げた。彼の小説家としての人生には、英国での留学体験が決定的な影響を与えている。

漱石が留学に行ったのは1900年（明治33年）10月28日である。日本は秋の季節ではあるが、ロンドンには既に冬に入り始めた寒い季節である。漱石は暖かい場所、そして自然が好きだった、そのことが冬の寒さの厳しい英国を好きになれなかった原因として挙げられるが、本稿は「永日小品」の中の「下宿」「過去の匂い」「霧」「昔」という留学中のロンドンに対してのイメージを題材にした四つの作品を分析し、漱石が英国に「寒い」、「暗い」、「寂しい」というイメージを抱いた理由は、漱石は「下宿」で出会った主人公である「主婦」と、生まれ育った環境面での共鳴によりトラウマとなった辛い幼少期が思い出され、英国留学における負の要素が一段と増したためであることを検討する。その結果、漱石は英国に気候面の暖かさだけではなく家庭的な温かさを求めていることが作品から読み取られた。

キーワード：英国、寒さ、暖かさ、寂しさ、生まれた環境

I. はじめに

1. 問題設定

夏目漱石（以下漱石）は数多くの名作を生み出し、近代作家として頂点を極めた明治の文豪である。彼の小説家としての人生には、英国での留学体験が決定的な影響を与えている。その体験は、苦渋に満ちたものであった。

苦渋に満ちた留学生活を終えて帰国後、その経験を生かし、大作「文学論」を完成させた。そして漱石が英国で獲得した、「私の個人主義」の定義も定着させた。

漱石は英国に2年間留学したが、2年間の留学生活について、その「文学論」序の末尾では次のように語っている。

「倫敦に住み暮らしたる二年は尤も不愉快の二年なり。余は英国紳士の間にあつて狼群に伍する一匹のむく犬の如く、あはれなる生活を営みたり。」¹⁾

彼にとって英国は決して住みやすい所ではなかった。

また、漱石の次男である夏目伸六氏は、「父・夏目漱石」の「英語嫌いの漱石」の中で、漱石の留学

生活について次のように書いている。

「古くから学問の府として聞こえたケンブリッジも、父の眼には、金と暇にあかせた単なるジェントルマンの養成所としてしか映らなかったし、university collegeを訪ねて聴講した現代文学史の講義からも、何等「予期の興味と知識」を得る事の出来なかった父は、結局何の方針も立てる事が出来ずに、唯茫然と英文学書の濫読にその一年間を通したのである。」²⁾

このように漱石は、留学生活の最初の一年間のほとんどの時間を下宿の自室に閉じこもり、読書と思索に没頭していたようで、孤独であったことが伺える。

本稿は、漱石が英国を舞台にした「永日小品」に収録されている漱石の四つの作品「下宿」「過去の匂い」「霧」「昔」を分析し、漱石が英国を好きになれなかった要因について検討したい。環境、気候、生まれた環境の影響があると推測されるが、これらの作品から漱石の英国留学における負の要素を探ってみたい。

Ⅱ. 先行研究及び考察視点

漱石の英国留学についての先行研究については、延芳晴氏は「夏目金之助 ロンドンに狂わせり」の中で、「下宿」と「過去の匂ひ」に登場する人物が実在しているかどうかなどについて、作品を詳細に解説している。

夏目伸六氏は先に述べた「父・夏目漱石」の「英国嫌いの漱石」の中で、父・漱石の英国嫌いの理由を、学生時代に学んだ漢文教育や英語より、英文学が好きだった視点から論じている。³⁾

また二宮智之氏は「夏目漱石『永日小品』考—『三四郎』と『それから』の間で—」の中で、寒と暖の表現を用いて「三四郎」と「それから」の間の作品、そして、漱石作品の全体における「永日小品」の位置について考察している。しかし、漱石と「下宿」の主人公「主婦」がどちらも親に冷たくされた同じ境遇であるという点には触れていない。

さらに塚本利明氏は「漱石と英国留学体験と創作との間」⁴⁾の中で、漱石がスコットランドの旅をした際のことを詳しく解説している。

本稿ではこれらの先行研究の中では触れられていない、「下宿」と「過去の匂ひ」の二つの作品に登場する主人公「主婦」と漱石との間の似た境遇に焦点をあて、漱石の幼少期の辛い体験が英国に対してのマイナスイメージにどのように影響したのかなどについて検討する。

考察視点としては先行研究を汲み取りながら、永日小品の「下宿」「過去の匂ひ」「霧」「昔」の四つの作品を通して、英国に関する漱石の感じ方について、ロンドンの寒さ、暗さ、そして都市化による空気の汚さ等の英国留学における負の要素を併せて、一步踏み込んで分析する。更に漱石が自らの生まれた環境の影響で、「下宿」と「過去の匂ひ」の主人公である「主婦」との境遇の共鳴を感じていたことなどを指摘し、漱石が英国に対して求めた暖かさは季節的なものだけではなく、家庭の温かい雰囲気だったのではないかということなどを考察する。

Ⅲ. 「永日小品」について

1. 「英国」「イギリス」の概念について

英国は「グレートブリテンおよび北部アイルランド連合王国」(the United Kingdom of Great Brit-

ain and Northern Ireland) が正式名称であり、イングランド、スコットランド、ウェールズ、北アイルランドの4つのカントリーから構成される立憲君主国である。

「イギリス」という日本語は、16世紀以降のポルトガル人やオランダ人の渡来によって、この4つのカントリーの一つであるイングランドを表すポルトガル語の「Ingles」とオランダ語の「Engelsch」を、日本人が「エゲレス」と聞き取ったことによって生まれた。「英国」は、その「イギリス」に充てられた「英吉利」の漢字から生まれた通称である。

日本では「イギリス」「英国」ともに国全体を指す名称として通用しているが、「イギリス」の語源は「イングランド」であるため、複数の地域による連合王国に対して、その構成国の一つを指す言葉で呼ぶのは正当性に欠けるという向きもある。また、イングランド以外の連合王国出身者に対してイギリス人と呼びかけると、気分を害する可能性がある。⁵⁾

上記の概念を踏まえたうえで、本論では「英国」を使用する。

2. 漱石の英国留学に対する気持ち

まず、漱石が英国留学に対して当初から消極的な気持ちだったことを指摘したい。

漱石は、英国から帰国後15年経って、学習院大学で行った講演「私の個人主義」の中で、英国留学当時の気持ちを次のように振り返っている。

「突然文部省から英国へ留学してはどうかといふ内談のあったのは、熊本へ行ってから何年目になりませうか。私は其時留学を断ろうかと思ひました。それは私のやうなものが、何の目的も有たずに、外国へ行ったからと云って、別に国のために役に立つ譯もなかろうと考へたからです。・・・私も絶対に反抗する理由もないから、命令通りに英国へ行きました。」⁶⁾

英国を15年離れたにもかかわらず、漱石は当時留学したくないという気持ちが強烈だったため忘れられなかったことが伺える。

また漱石は、「文学論」の中でも次のように語っている。

「余が英国に留学を命ぜられたるは明治三十三年にて余が第五高等学校教授たるの時なり。(中略)

余は特に洋行の希望を抱かずと云ふ迄にて、固より他に固辞すべき理由あるなきを以て承諾の旨を答へて退けり。」⁷⁾

これらの記述から、漱石が最初から英国留学を積極的に希望しておらず、むしろ、少し消極的な姿勢だったことを読み取ることができる。

辞令には「英語の研究のため満2年間英国へ留学を命ず」とあったが、漱石の関心は英語の研究ではなく、西洋文学を研究することにあったからである。

夏目伸六氏は、「父・夏目漱石」の「英語嫌いの漱石」の中で、漱石の英語と英文学についての思いを次のように述べている。

「併し、こうして漸く英文科へ進む事に決心はしたものの、その頃の父には、未だに英語に対する情熱などはほとんどなかったらしく、唯、『国語や漢文なら別に研究する必要もない様な気がしたから、其処で英文学を専攻することにした。』と云って居る程である。・・・中略・・・父の方向が、英語を離れて次第に文学そのものへ向けられて行った経緯が窺われるのであるが・・・」⁸⁾

漱石は英国に留学しても英語の研究ではなく、英文学の研究をしてもよいという「留学の目的は幅広く柔軟のもの」との文部省の見解を得て、彼は留学を決意したのである。

明治33（1900）年9月、漱石は横浜港から出発し、パリを経て10月28日、英国に到着した。⁹⁾

3. 「永日小品」の背景

漱石は明治33（1900）年英国留学を命じられ、その年の10月から明治35（1902）年2月まで約2年間ロンドンに滞在した。

数多く残されている夏目漱石の文学作品の中で、「永日小品」はあまり知られていないようだが、長編「三四郎」の連載の後に「夢十夜」のような短編物の連作を求められて、明治42（1909）年1月から3月まで朝日新聞に掲載され、日常に題材をとったものや英国留学時代に題材をとった25編の小品からなっている。

4. 「下宿」の背景

その「永日小品」の中の1編「下宿」は、漱石が

ロンドンでの下宿を題材に自ら英国留学時代に触れた最初の作品である。

英国留学の約2年間は、漱石にとって決して楽しいものではなかった。漱石がロンドンに到着した明治33年（1900年）10月28日は、日本ではまだ秋の季節だが、ロンドンでは既に冬の時期だった。よって、最初の下宿した時期は日本から遠く離れた英国という北国での本当に寒い、一人寂しい冬という時期であり、漱石にとっては二重の負の要素に見舞われた体験だった。

漱石はロンドンでの約2年間の英国留学中、五つの宿に移り住んだ。このロンドンでの留学の体験を題材にした「永日小品」の「下宿」と、もう一つの「過去の匂い」の2編の作品の舞台は、どちらも五つの宿の中の第二の宿にあたる。

この宿は、高級住宅地から少し離れたところにあった。漱石はこの宿に明治33（1900）年11月12日に移り、約40日間滞在し、ここで台湾総督府に勤める長尾半平と知り合った。

IV. 「下宿」と「過去の匂い」作品からの分析「下宿」の要約

「下宿」は、漱石が宿泊した第二の宿の複雑な家族構成などについて描写した作品である。主人公の主婦はフランス人であるが、父親はドイツ人である。この父親は主婦の母親の再婚相手である。母親が亡くなってから遺産はすべて継父に奪われ、主婦と継父の関係は陰湿な状態になっている。漱石はこの家族に不仲、淋しさ、暗さを感じていると同時に、主婦の境遇に自分に似た共鳴するものがあると感じたのである。

1. 「下宿」を気候から分析

1) マントルピースについて

「下宿」の中では、マントルピース (mantelpiece) について次のように描写している。「日の当たったことのないような薄暗い部屋を見回すと、マントルピースの上に淋しい水仙が生けてあった。」

「ブリタニカ国際大百科事典 小項目事典」は、「マントルピース」について次のように解説している。「居間やホールの壁につくりつけられた暖炉のまわりに行う装飾。のちにはそのような飾りをもつ暖炉全体をさすようになった。最初は煙を吸込むた

めの簡単なおおいであったが、中世後期には大型の飾りがつけられ、ルネサンス期には飾り柱やなげしがつけられ、部屋の格式を示す室内装飾の重要な要素となる。」¹¹⁾と解説されている。

このように「マントルピース」が室内装飾の重要な要素であったにもかかわらず、「その上に淋しい水仙が生けてあった」という記述は、部屋すなわち建物全体に寂しいイメージが広がることを計算した狙いが考えられる。

そして上記の引用から、「マントルピース」が「そのような飾りをもつ暖炉全体」をさすものだったことにも注目したい。マントルピースは、今では暖炉と言っている。11月初旬だと日本はまだ秋の季節で冬の寒さは感じられないが、ロンドンでは既に暖炉が必要な時期となっていたことが分かる。ロンドンの11月は、日本の冬の季節と変わらないくらいの寒さであったことも伝わってくる。

表Ⅰ 2013年11月の平均気温の比較

都市	平均最高気温	平均最低気温	平均降雨量
東京	16.7℃	9.5℃	92
ロンドン	10.4℃	5.1℃	58.1

出所：http://www.accuweather.com 世界天気
日本気象協会 2014日本とロンドンの2013年11月の気温降水量の比較

表Ⅱ 1900年11月の東京の平均気温

都市	平均最高気温	平均最低気温	平均降雨量
東京	16.3	6.7	131.9

出所：http://www.data.jma.go.jp
国土交通省気象庁

表Ⅰを見ると、同じ2013年11月でもロンドンの最高気温が10.4℃なのに対して東京は16.7℃もあり、東京はロンドンより6℃以上も高い。また、ロンドンの最低気温が5.1℃であるのに対して東京は9.5℃で、ロンドンと東京とでは4.4℃の差がある。

表Ⅱを見ると、1900年11月の東京の最低平均気温は6.7℃だったことから、当時は今より寒かったことが分かり、1900年11月のロンドンも今より寒かったと推測することができる。

漱石の妻・鏡子は、「漱石の思い出」の中で次のように述べている。

「夏目がロンドンの気候の悪いせい、なんだか妙にあたまが悪くて、この分だと一生このあたまは使えないようになるのじゃないかなどとたいへん悲観したことをいつてきたのは、たしかあくる年の春ではなかったかと思っております。」¹²⁾

この引用からも、漱石がロンドンの春が来るまでの長い間、寒い冬の気候のせいで頭が働かないことを訴えていたことが伺える。

またロンドンには雨が多いことで有名であるとともに、「霧の都」と言われるほど霧が多く発生することでも知られる。日中も晴れる日が少ないことから、暗く、寒いというイメージが湧きやすく、その厳しさ寒さの度合いが想像される。

さらに、「明るい」は「暖かい」、「暗い」は「寒い」を感じさせる表現だが、引用した「下宿」の中での「薄暗い部屋」の「薄暗い」は、寒い季節に「薄暗い」という表現で、先に述べたロンドンのイメージと合わせて、一層寒さを引き立てている。

2) 水仙について

次に、「日の当たった事のないような薄暗い部屋を見回すと、マントルピースの上に淋しい水仙が生けてあった。」と書かれた「水仙」に注目したい。

水仙（英名ではナルシスという）はフランスでは3、4月頃開花するが、11月に開花する種もあるのである。¹³⁾英国では4、5月頃に開花するので、冬の時期ではフランスならきれいに咲けるが、英国ではきれいに咲けないことを意味している。また日本での水仙の花期は12月から2月となっているため、フランスの水仙の開花期に似ていることが分かる。

日の当たった事のない薄暗いという表現によって部屋の寒さが伝わってくることはすでに指摘したが、「マントルピースの上に寂しい水仙が生けてあった。」という描写によって、「水仙も主婦の出生地である南の国・フランスであれば日も当たり、水仙もきれいに咲けるのに、北の国・英国では元気もない・・・」との意味合いも込めて、その「寂しさ」を強調している。

「主婦は北の国に似合わしからぬ黒い髪と黒い瞳をもっていた。」という表現も、主婦は水仙と同じ

くイギリスの冬になじめないことを暗示している。漱石は「下宿」の中で、「水仙」と主婦について次のように記述する。

「自分は肚の中で此の水仙の乏しく咲いた模様と、この女のひすばった頬の中を流れている、色の褪めた血の握りとを比較して、遠い仏蘭西で見るべき暖かな夢を想像した。主婦の黒い髪や黒い眼の裏には、幾年の昔に消えた春の匂の空しき歴史があるのだろう。」¹⁴⁾

この言葉には、「水仙のように今の時期に主婦がもし暖かいフランスにいれば、一番きれいに咲いているだろうに……。そして、昔いた暖かいフランスではきれいに咲いていたのだろう」という漱石の主婦に対する思いが隠されている。

続けて、漱石は次のように記述する。

「そうして黒い眼を動かして、後の硝子壺に挿してある水仙を顧りみながら、英吉利は曇っていて、寒くていけないと云った。花でもこの通り奇麗でないと教えたつもりなのだろう。」¹⁵⁾

この記述は、水仙が暖かい国から寒い北国に来てきれいに咲けないのと同じように、人間も暖かいところから知らない寒いところに来たことで、水仙のように萎えてしまうことを伺わせる。即ち、主婦自身のことを水仙に暗示するとともに、暗示することによって、漱石自ら主婦と同様に暖かい南の日本から寒い英国に来たことによって英国になじめず、主婦と同感していることを表現したものとなっている。

次に指摘したいのは、漱石が「下宿」の中で「北」という言葉の表現に拘っていることである。英国は「北の国」、宿泊した「下宿は北の高台にある。」、更に、下宿の中にある食事をする「北向きの食堂」など、いずれも「南」と相反して、「北」という言葉を使って「寒い」イメージを連想させている。

「北の国」という表現は、主婦の故郷がフランスなので、位置も英国からみると南にあたることを強調するような表現とも言える。また「下宿は北の高台にある」という表現は、寒いロンドンの中でも下宿は北に位置していることで一層の寒さを強調している。

「北向きの食堂」という表現は、建物の中で家族

が集まって食事しているところでさえ北向きになっており、建物の寒さだけではなく、家庭の「温もり」を感じられない寒い、寂しい、暗い下宿であることを暗示している。

フランスから来た主婦、日本から来た漱石、どちらも南から北へ移動する度に体も心も寒くなっていることが伺える。

2. 漱石と主婦の生まれた環境からの分析

1) 「下宿」の主人公主婦の境遇について

「下宿」で主人公の主婦は、フランス人で実の母が亡くなりドイツ人の継父に引き取られたが、血が繋がっていないことから冷遇されたことが以下の「下宿」の引用から伺える。

「母はよほど前になくなった。死ぬときに自分のことをくれぐれも言い置いて死んだのだが、母の財産はみんな継父の手に渡って、一銭も自由にすることができない。仕方ないから、こうして下宿をして小使いをこしらえるのである」¹⁶⁾と書いている。

このように、継父は死んだ母から主婦のことを頼まれていたにもかかわらず、主婦は継父からの愛情を全く受けられなかった。

主婦の境遇と似ているように、実父から冷たくされた自分の境遇を重ね、主婦に共鳴を感じたのではないかと考えられる。

ここで漱石の生まれた環境について触れてみたい。

2) 漱石の生まれた環境について

漱石は慶応3年(1867年)1月5日に誕生した。父・夏目小兵衛直克は江戸牛込馬場下の名主で当時50歳、小兵衛直克の妻だった母・千枝が41歳の時の子で、五男三女の末っ子であった。

漱石は「硝子戸の中」で、「私は両親の晩年になってできた所謂末っ子である。私を生んだ時、母はこんな年齒をして懐妊するのは面目がないと云ったとかいふ話が、今でも折々は繰り返されている。」¹⁷⁾と記述している。

さらに続けて、漱石は「硝子戸の中」で次のように書いている。

「単に其為ばかりでもあるまいが、私の両親は私が生まれ落ちると間もなく、私を里に遣ってしまっ

た。其里というのは、無論私の記憶に残っているはずがないけれども、成人した後聞いて見ると、何でも古道具の売買を渡世にしていた貧しい夫婦ものであったらしい。」¹⁸⁾

里子に出されたのは、父・夏目小兵衛直克に書生同様に仕えた塩原昌之助のところで、明治元年(1868年)11月のことだった。

夏目家は貧乏だったわけではない。

母・千枝が「面目ないと云った」のは、現代と違って明治時代の一般的な考え方は、女性が歳を取って(40歳過ぎ)から子どもができることは恥だと言われていたことからで、この記述からも漱石は生まれた時から社会的にはあまり歓迎されなかった子どもであったことが伺える。しかし親にどんな事情があったとしても、漱石にとっては裕福で養う能力があったにもかかわらず実の家より貧乏な家に里子に出されたのは、子どもの漱石にとっては到底納得できる話ではなかったはずである。

同じ「硝子の中」で、里子に出されてから一度家に戻った際、父から見向きもされずに冷たくされたことについて、次のような回想を述べている。

「私は其道具屋の我楽多と一所に、小さな笹の中に入れられて、每晚四谷の大通りの夜店に晒されていたのである。それを或晩私の姉が何かの序に其所を通り掛かった時見付けて、可哀そうとでも思ったのだろう、懷へ入れて宅へ連れてきたが、私は其夜どうしても寝付かずに、とうとう一晩中泣き続けに泣いたとかいふので、姉は大いに父から叱られたそうである」¹⁹⁾

漱石は、里親からも冷たくされ、外に放置されることがしばしばあった。姉に見つけられて、せっかく一度、実家に戻ったにもかかわらず、父は喜ぶどころか漱石を見ようとしなかった。

更に、漱石は、父から愛情を全くもらえなかったことに関しての心境を次のように書いている。

「私は普通の末っ子のやうに決して両親から可愛がられなかった。是は私の性質が素直でなかった為だの、久しく両親に遠ざかったためだの、色々の原因から来てゐた。とくに父から寧ろ過酷に取り扱われたといふ記憶がまだ私の頭に残ってゐる。それなのに浅草から牛込へ移された当時の私は、何故か非常に嬉しかった。さうしてその嬉しさが誰の目にも

付く位に著しく外へあらはれた。」²⁰⁾

このように、漱石は父から愛情をもらえなかったことを悲しむより、父親に過酷に取り扱われたにもかかわらず、むしろ家に戻ることになぜか非常に喜びを感じていたのである。

漱石は、小さい時から家庭の温かさに飢えていたことが伺える。

漱石は9歳の時、里親の塩原夫婦の間で離婚が成立したため、塩原家に在籍のまま養母と共に夏目家に引き取られる。普通なら久しぶりに帰ってくるわが子の顔を見るのが嬉しいはずなのに、出来損ないが舞い込んで来たという顔付きをした父は、ほとんど子としての待遇を彼に与えず、実父なのに継父以上に冷たかった。そして、明治21年(1888年)、21歳になった時ようやく夏目家に復籍する。

このように漱石は、生まれた時から実の親の愛情を全く受けたことがなく、なぜ自分だけが養子に出されなければならないのかという疑問を一生抱え込むことになり、彼の内向的な性格も、この複雑な家庭環境に関係があることが推測できる。

この幼少期の体験は、英国留学にも引きずっていたことが作品から読み取れる。

3) 漱石の生まれた環境と主婦との共鳴

漱石も「下宿」の主人公の主婦も、それぞれ違う国である日本とフランスから英国に遣って来た人間で、しかも、二人とも好き好んで英国に来たわけではない。漱石は日本の文部省の命令を受けて、また主婦は生きるために仕方なく継父とフランスから英国に来ている。英国は日本、フランス双方から見た時、北に位置にしているので寒いイメージがある。フランスと日本という暖かい国を離れて寒い国・英国に来て、寂しさと寒さに打たれている漱石と主婦という構図がある。

漱石が「下宿」中で描写している「北向きの食堂のマントルピースの上に水仙が寂しく生けてあった」という表現は、建物の中で食事をする場所イコール家族団欒するような食堂に、しかも、建物の中で一番重要な位置にあるマントルピースの上に「水仙が寂しく生けてあった」というのは、漱石も主婦も北向きの下宿の中の北向きの食堂の建物から身体的な寒さだけではなく、家族団欒の喪失という

寒さを感じていたことを伺わせ、親に愛されるという家庭の温かさはずっと飢えていたことが共通点であることが分かる。

漱石は幼少時に里子に出されて、実の親から愛情を与えてもらえなかった。一方、主婦も実の父親が亡くなったことで、母親は再婚し、その後しばらくして亡くなった。以後母親がいないことで継父に冷たくされており、漱石も主婦も実の親からの愛情に飢えていたのである。

漱石と主婦の間には、新しい環境である英国になじまないことから、今の居場所が嫌いなことなどの幾つかの共通点も見えてくる。主婦と漱石は親に冷たくされるという同じような境遇を合わせ持っていたため、下宿先は漱石にとって居心地の良い場所ではなかったとも考えられ、彼はその寂しさと寒さそして居心地の悪さに耐えかね、1か月経って、下宿を去った。

そしてこの下宿を去ったもう一つ理由は、漱石の辛い体験が幼少期にまでの経験であるのに対して、主婦の場合その禍中であり、しかもこれから先も続くという辛い現実と直面したため、漱石は自身の幼少期のトラウマからこそ逃れようという気持ちがあるから、この寒い、暗い、寂しい下宿を出たいと思ったのではないかと考えられる。

2番目の下宿＝Priory Road 85番地。



4)「過去の匂ひ」の中の主婦と心通わせたことについての分析

漱石が主婦と心通わせたことについて、「下宿」の作品に続き「過去の匂ひ」から見てみよう。

漱石が下宿を出ることには、同じ下宿に同じ時期に下宿していたK君も賛成してくれた。漱石はK君の招きに応じ、3ヶ月後にK君の旅行談を期待しな

がらそこへ行ったが、迎えてくれたのは元下宿の家族であった。そこには、家族の暗い雰囲気を持った下宿の匂いが漂っていた。

「下宿」では、漱石が「主婦」と「北向きの食堂」で主婦の身の上話を聞いて、「主婦」の複雑な家庭環境を理解し、「主婦」と自分の生まれた環境とを重ねることによって主婦と心通わせたことができたが、「過去の匂ひ」では漱石がこの下宿を出ようと思った時の主婦の反応を次のように表現している。

「自分が下宿を出るとき、老令嬢は切に思ひとまるようにと頼んだ。下宿料を負ける、K君のいない間は、あの部屋を使っても構わないと迄云ったが、自分はとうとう南の方へ移って仕舞った。同時にK君も遠くに行って仕舞った。」²¹⁾

主婦にとっては、自身と似た境遇を持った宿泊者である漱石が、次第に身の上話まで話せるほど心を許せる相手に変わっていったことで、短い時間でも寂しさから逃れることができた。だからこそ、必死で引き止めたと思われる。一方、漱石はこの家を出ようと思ってK君に告げた時、K君から「君などは、もっとコンフォタブルな所へ落ち着いて勉強したらよかろう」という注意も受けて、この北にある寒い、暗い、寂しい下宿から出る決意をしたことが分かる。

ここで、先に引用した「過去の匂ひ」の中の「南の方へ行って仕舞った」という表現にも注目したい。こう表現した漱石の中では、下宿は北と等しい意味を持っていたことが伺える。「南に行って仕舞った」とは、換言すれば「暖かいところに逃げた」ともいえる。

さらに、漱石は次のように書いている。

「突然K君の手紙に接した。旅から帰ってきた。當分ここにいるから遊びに来いと書いてあった。すぐ行きたかったけれど、色々都合があつて、北の果迄推し掛ける時間がなかった。」²²⁾

ここでは「南」と対照的に「北」の、しかも「果迄」という表現を用い、「行きたかったけれど」が本心ではなかったかのように表現したと思われる。

何故ならK君には逢いたい気持ちはあったが、あの北向きの下宿の北向きの食堂のマントルピースの上に水仙が寂しく生けてあった、暗い、淋しい下宿に行つて、「主婦」に逢えば、漱石にとって忘れた

くても忘れられない、長年に渡り悩まされている幼少期の辛い体験の記憶が再び蘇るのではないかということに危惧し、下宿に行くことを躊躇したのではないかと推測できる。それと裏返しに、下宿を離れたことで家庭の温かさに恵まれていない象徴である「主婦」を見なければ、幼少期の体験も思い出さずにいられるという漱石の心が、常に温かくて明るいところを求めているように感じるのである。

そして、「下宿」から離れて3か月ほど経った頃、一度K君に逢いに行った時、K君の部屋に行く途中のこととして、「過去の下宿の匂ひ」は次のように表現する。

「過去の匂ひが狭い廊下の真中で、自分の嗅覚を稲妻の閃くごとく、刺激した。」²³⁾

それは、漱石が一度忘れかけた下宿の記憶が一気に戻った瞬間であった。その表現には、下宿の記憶は彼にとって良い思い出ではなかったが、決して、脳裏から消すことが出来なかったものであったという意味合いが込められている。

さらに「過去の匂ひ」は、その匂いについて次のように描写している。

「その匂ひのうちには、黒い髪と黒い眼と、クルーゲルのような顔と、アグニスに似た息子と、息子の影のようなアグニスと、彼らの間に蟠まる秘密を、一度にいっせいに含んでいた。自分はこの匂いを嗅いだ時、彼らの情意、動作、言語、顔色をあざやかに地獄の裏に認めた。」²⁴⁾

この主婦の家族すべてが地獄にいと認めたという表現は、漱石自身が下宿に対してもつ負の要素を強く感じる描写であると同時に、読者にもインパクトの強い印象を与える描写である。

そして漱石が一度忘れかけた下宿の匂ひが一瞬に戻ったことによって、幼少期の実の親に捨てられ、里子に出された辛い体験がフラッシュバックしたとも推測することができる。

夏目伸六氏は、父の内向的な性格について「『父・夏目漱石』 英語嫌いな漱石の章」の中で次のように述べている。

「この時父が自分で選んだ志望学科は、皆の予想を裏切って工科の建築科である。・・・中略尤もこれは、生来偏屈で融通性のない性格を自覚していた父が・・・」²⁵⁾

この引用からも漱石は内向的で、うまく人とコミュニケーションがとれない性格だったことが伺え、これもまた漱石の幼少期の辛い体験と大きく関連していると思われる。

このような性格の漱石だったので、英国留学中の約2年間、英国人とほとんどかかわりがなかったが、この下宿に滞在中に主婦と心通わせたことは確かである。ロンドンの下宿で似た境遇の主婦と出会って会話を交わしたことで理解し共鳴し、幼少期の辛い体験を思い出したとはいえ、少しでも英国に在住している現地の人とコミュニケーションがとれて心を通わせることができた瞬間だったともいえる。

V 「霧」と「昔」からの分析

「霧」の 霧のロンドン²⁶⁾



1. 「霧」の空気の汚さについての表現

「霧」の中では、空気の汚さに対して次のように表現している。

「ヴィクトリヤで用を足して、テート画館の傍を河沿にバタシーまで来ると、今まで鼠色に見えた世界が、突然と四方からぱったり暮れた。泥炭を溶いて濃く、身の周囲に流した様に、黒い色に染められた重たい霧が、目と口と鼻とに逼って来た。外套は抑えられたかと思う程濡っている。軽い葛湯を呼吸するばかりに氣息が詰まる。足元は無論穴蔵の底を踏むと同然である。」²⁷⁾

古くから石炭を燃料に使っていたロンドンでは、12世紀からスモッグ発生の記録があり、スモッグという言葉が初めて公に使われたのも英国である。そして、蒸気機関車の出現と産業革命により、19世紀に入り大気汚染は深刻になった。

漱石はちょうどこの時期に、英国に留学していた。漱石は日記の中で大気汚染について「ロンドンの町を散歩して痰を吐くと黒い塊が出てきて驚く」

と書いている。

2. 「昔」の暖かさの表現について

「昔」のPitlochry ピトロクリの谷²⁸⁾



漱石は「昔」の中で、「暖かさ」については次のように述べている。

「十月の日が、目に入るのと林を暖かい色に染めた中に、人は寝たり起きたりしている。」²⁹⁾

この引用には漱石が「南」と「暖かい」を結びつけた表現がみられる。

小宮豊隆氏は漱石の『小品集』の解説の中で、「元来漱石は、生理的にも、暖かいものを愛した。色彩、漱石の好きなのは、暖かい色彩である。四季の内でも漱石の好きなのは、暖かい春である。またそれが暖かである限りに於いて、秋である。」³⁰⁾と小宮豊隆氏が漱石の『小品集』の解説の中で述べているように、漱石は暖かいところが好きだった。

3. 「昔」の自然についての表現

「昔」で描写しているスコットランドの避暑地ピトロホリーにあるピトロクリの谷は、写真通り、自然と暖かさが満ちた場所だと見られる。

「昔」は、次のような描写から書き始められる。

「十月の日は静かな谷の空気を空の半途で包んで、じかには地にも落ちて来ぬ。と云って、山向へ逃げても行かぬ。風のない村の上に、いつでも落ちついて、じっと動かずに靄すんでいる。その間に野と林の色がしだいに変わって来る。酸いものがいつの間にか甘くなるように、谷全体に時代がつく。ピトロクリの谷は、この時百年の昔、二百年の昔にかえって、やすやすと寂びてしまう。人は世に熟れた顔を揃えて、山の背を渡る雲を見る。その雲は或時は白くなり、或時は灰色になる。折々は薄い底から山の地を透かせて見せる。いつ見ても古い雲の心地

がする。」

小宮豊隆氏は同じ『小品集』の解説の中で、漱石が自然をこよなく愛していたことを次のように記している。

「漱石は静かで、暖かで、朗らかで、澄んでいて、公平で無私で沈黙としての『自然』であった。この自然は何よりも漱石を楽しましめ、何よりも漱石を慰め、それと一つになることが、漱石に無上の幸福感を與へるのである。」³¹⁾

漱石はロンドンの寒さ、暗さ、空気の汚さが原因で英国に対してマイナスイメージしか持っていなかったが、スコットランドにある友人の屋敷を訪ねた3週間、この自然に触れることができたのである。「昔」に描かれたピトロクリの谷には、「霧」に出てくる工業化によって自然が奪われ、汚い空気で汚れたロンドンとは違って、まさに、漱石が愛した自然が溢れていた。英国留学中で最も自然に癒され、心が安らかになった一時であった。

VI. 考察と分析

以上、永日小品に収録された「下宿」、「過去の匂ひ」、「霧」、「昔」の4篇の作品を用いて、漱石が英国留学した時の下宿の体験と寒と暖、動と静、幼少期の辛い体験による家族の温りへの飢え、そして自然と近代化を中心に負の要素について分析した。

「下宿」「過去の匂ひ」は、漱石と主人公の主婦との境遇、人生、自分の幼少期、そして故郷、離れた寂しさを重ね合うように感じ取った作品である。漱石は英国に滞在した約2年間、様々な辛い体験をしており、下宿での寒さや寂しさ、暗さの体験や、自然が好きなのに工業化が進んだロンドンの汚い空気に汚染されて、漱石は体調まで悪くなったことなどによって、英国に対してのイメージは負の要素が満ちていたともいえる。

しかし、そのつらい体験の中、下宿の主人公の主婦との会話によって、似た境遇に共鳴し、英国留学中のほんのわずかの間だけであったが、主人公の主婦が心を開いてくれたことにより、下宿の体験は漱石が現地人と心通わせたことを感じた瞬間でもあったことが伺える。

また、漱石の暖かさを求める心境については、「昔」での暖かさについてのところで述べたよう

に、気候の暖かさをこよなく愛することは勿論、そこから派生した家庭の温かさと、人間として憐れる暖かさ・温かさを求めることを想像せずにいられないのである。

漱石と「主婦」との生まれた環境の共鳴を指摘した際にも述べたように、漱石は裕福な家庭に生まれたにもかかわらず、親の都合で里子に出された。

「主婦」は自分のことを死んだ母親から頼まれたにも関わらず、その継父から母の財産を奪われ、冷遇された。漱石と主婦はそれぞれ違う暖かい国から寒い英国に来たが、同じ境遇で辛い過去を背負っていた。

二人とも暖かい国から寒い英国に来て気候になじめない上に、「下宿」に漂っている家族の不和の雰囲気が一層暗さと寂しさを際立たせている。

また漱石が留学の時期も悪く、イギリスでは初冬ということで、11月は日本では秋で良い季節なのに、ロンドンではすでに寒くなっている。この時期にイギリスに到着したこともマイナス要素の一つになると考えられる。

そして北向きの食堂にマントルピースの上に寂しく生けてあった水仙を借用して、家族団欒するところでさえ寒い寂しい雰囲気であることを強調することで、家庭の温かさが全くない「下宿」を感じさせている。

夏目伸六氏が「思うに、それ迄は余り人目につかずに、徐々に父の内部に醸成されていた生来の症状が、内外の悪条件と相俟って、・・・一瞬にして父の英国における凡ての印象を、不快の一角に塗りつぶしてしまったのである。」³²⁾と書いている「生来の症状」というのは神経衰弱であり、この神経衰弱の発端は拙著、「漱石『個人主義』思想の自恃論的要素ーアメリカ超越主義からの影響を探るー」で「幼少期に関しては、漱石は生まれてすぐ里子に出されて、実の親から愛情をもらえず愛情に飢えた幼少期を送り、被害妄想やうつ病になりやすいトラウマでもあった。」³³⁾と記述したように、幼少期の辛い体験であった。

漱石は、幼少期に親に里子としてよそに出された辛い体験の影響により、漱石がトラウマになり、英国で寒さ、暗さ、寂しさにより思い出され、寒さ、暗さ寂しさだけではなく、家庭の温かさにも飢えて

いたことも、英国留学における大きな負の要素の一つになったと考えられる。

漱石が英国を最後まで好きになれなかった要因は多々あるが、下宿で似た境遇の主婦と出会うことによって、幼少期の辛い体験や、家庭の温かさに飢えていたことが蘇らせられるなど、負の要素が一段と増したことも大きな要因ではないかと考えられる。またその負の要素が、英国に対してのマイナスイメージをさらに拡大させていったのではないかと推測することができる。

VII. 終わりに

以上、英国への留学における負の要素について分析した。幼少期、里子に出され、親に冷たくされた辛い体験は、漱石の性格形成に、そして、英国留学においても、漱石の人生においても、大きな影響を与えた。

社会体系の中、血縁関係が一番基本的な関係である。特に親と子の関係は切っても切れない血縁関係であり、英国留学中の下宿での漱石の気候面での寒い、暗い、寂しい体験、そして、下宿の「主婦」との境遇面での共鳴によって、思い出させられた幼少期の辛い体験が、英国留学における大きな負の要素の一つとなった。

漱石の作品には、親が存在しないか、もしくは片親だけの場合が多く、幸せな家庭の描写はほとんどないのが特徴である。

例えば、有名な『吾輩は猫である』の中でも「ふと気が付いて見ると、書生がいない。澤山居った兄弟が一疋も見えぬ。肝心の母親さへ姿を隠して仕舞った。」³⁴⁾などと描かれている。

このように漱石が作品の中で完璧な家庭を描写しない理由は、彼が幼少期に里子に出されたという辛い体験に関係している可能性があり、その心を大きく傷つけられた思い出したくない幼少期の実体験が、作品においても完璧な家庭を描写したくない、もしくは描写できないことに繋がっていると推測できる。

今後、この幼少期の辛い体験が漱石の作品創作にどのような影響を与えたのかについて、更に考察していく必要がある。

【引用・参考文献】

- 1) 『文学論』序
- 2) 『父・夏目漱石』 夏目伸六 文芸春秋社 夏目伸六 1964年P87
- 3) 『夏目金之助 ロンドンに狂わせり』 青土社 末延芳晴 2004年
- 4) 『漱石と英国 留学体験と創作との間』 彩流社 塚本利明 1999年
- 5) <http://dic.nicovideo.jp> 単語記事: イギリス
- 6) 『漱石全集』 第十一巻 岩波書店 昭和49年P440
- 7) 『文学論』序 文芸春秋社 夏目伸六 1964年P86
- 8) 『父・夏目漱石 英語嫌いな漱石』 夏目伸六 文芸春秋社 夏目伸六 1964年P86
- 9) 『父・夏目漱石 英語嫌いな漱石』 夏目伸六 文芸春秋社 夏目伸六 1964年P86
- 10) 『漱石全集』 第八巻 岩波書店 昭和49年P82
- 11) ブリタニカ国際大百科事典 小項目事典
- 12) 『漱石の思い出』
- 13) <http://blogs.yahoo.co.jp/nekonoseu/10535952.html>
パリの植物園
- 14) 『漱石全集』 第八巻 岩波書店 昭和49年P82
- 15) 『漱石全集』 第八巻 岩波書店 昭和49年P82
- 16) 『漱石全集』 第八巻 岩波書店 昭和49年P84
- 17) 『漱石全集』 第八巻 岩波書店 昭和49年P481
- 18) 同上
- 19) 同上
- 20) 『漱石全集』 第八巻 岩波書店 昭和49年P482
- 21) 『漱石全集』 第八巻 岩波書店 昭和49年P521
- 22) 『漱石全集』 第八巻 岩波書店 昭和49年P87～88
- 23) 『漱石全集』 第八巻 岩波書店 昭和49年P88
- 24) 『漱石全集』 第八巻 岩波書店 昭和49年P88
- 25) 『父・夏目漱石』 夏目伸六 文芸春秋社
夏目伸六 1964年P84
- 26) <http://ja.wikipedia.org/wiki/ロンドンスモッグ>
- 27) 『漱石全集』 第八巻 岩波書店 昭和49年P112
～113
- 28) <http://home.netyou.jp/kk/ohsawa/uk120pitlochrycow.htm> Pitlochry ピトロクリの谷
- 29) 『漱石全集』 第八巻 岩波書店 昭和49年P123
- 30) 『漱石全集』 第八巻 岩波書店 昭和49年P521
- 31) 『漱石全集』 第八巻 岩波書店 昭和49年P524
- 32) 『父・夏目漱石 英語嫌いな漱石』 夏目伸六
文芸春秋社 夏目伸六 1964年P89
- 33) 高 継芬 山本孝司 九州看護福祉大学紀要Vol. 13
No. 1 P47漱石「個人主義」思想の自峙論的要素ーア
メリカ超越主義からの影響を探るー
- 34) 『漱石全集』 第一巻 岩波書店 昭和49年P6

～525